

第1問

$$(1) \quad f'(x) = (-\sin x) \log(\cos x) + (\cos x) \frac{-\sin x}{\cos x} + \sin x + (\cos x) \log(\cos x)$$

$$= (\cos x - \sin x) \log(\cos x)$$

より, $f(x)$ の増減は次のとおり.

x	0	...	$\frac{\pi}{4}$...	$(\frac{\pi}{2})$
$f'(x)$		-	0	+	
$f(x)$		↘		↗	

よって, $f(x)$ は $0 \leq x < \frac{\pi}{2}$ において最小値を持つ. (証明終り)

$$(2) \quad f\left(\frac{\pi}{4}\right) = -\frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 - \frac{1}{\sqrt{2}} + \int_0^{\frac{\pi}{4}} (\cos t) \log(\cos t) dt$$

であり,

$$\int_0^{\frac{\pi}{4}} (\cos t) \log(\cos t) dt = [(\sin t) \log(\cos t)]_0^{\frac{\pi}{4}} - \int_0^{\frac{\pi}{4}} (\sin t) \frac{-\sin t}{\cos t} dt$$

$$= -\frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 + \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{1 - \cos^2 t}{\cos t} dt$$

$$= -\frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 + \int_0^{\frac{\pi}{4}} \left(\frac{1}{\cos t} - \cos t \right) dt$$

$$= -\frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 + \int_0^{\frac{\pi}{4}} \left(\frac{\cos t}{1 - \sin^2 t} - \cos t \right) dt$$

$$= -\frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 + \int_0^{\frac{\pi}{4}} \left\{ \frac{1}{2} \left(\frac{\cos t}{1 - \sin t} + \frac{\cos t}{1 + \sin t} \right) - \cos t \right\} dt$$

$$= -\frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 + \left[\frac{1}{2} \{ -\log(1 - \sin t) + \log(1 + \sin t) \} - \sin t \right]_0^{\frac{\pi}{4}}$$

$$= -\frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 + \frac{1}{2} \log \frac{1 + \frac{1}{\sqrt{2}}}{1 - \frac{1}{\sqrt{2}}} - \frac{1}{\sqrt{2}}$$

$$= -\frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 + \log(\sqrt{2} + 1) - \frac{1}{\sqrt{2}}$$

第1問 (つづき)

であるから、求める最小値は、

$$\begin{aligned}
 & -\frac{1}{2\sqrt{2}}\log 2 - \frac{1}{\sqrt{2}} - \frac{1}{2\sqrt{2}}\log 2 + \log(\sqrt{2} + 1) - \frac{1}{\sqrt{2}} \\
 & = -\frac{1}{\sqrt{2}}\log 2 - \sqrt{2} + \log(\sqrt{2} + 1). \qquad \dots (\text{答})
 \end{aligned}$$

((2)定積分の別解)

$x = \sin t$ とおくと、

$$\frac{dx}{dt} = \cos t$$

であり、 t と x の対応は次のようになる。

t	$0 \rightarrow \frac{\pi}{4}$
x	$0 \rightarrow \frac{1}{\sqrt{2}}$

このとき、 $\cos t > 0$ より $\cos t = \sqrt{1 - \sin^2 t}$ であるから、

$$\begin{aligned}
 \int_0^{\frac{\pi}{4}} (\cos t) \log(\cos t) dt &= \int_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} \log(\sqrt{1-x^2}) dx \\
 &= \frac{1}{2} \int_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} \{\log(1+x) + \log(1-x)\} dx \\
 &= \frac{1}{2} [(1+x)\log(1+x) - x - (1-x)\log(1-x) - x]_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} \\
 &= \frac{1}{2} \left[\log \frac{1+x}{1-x} + x \log(1-x^2) - 2x \right]_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} \\
 &= \log(\sqrt{2} + 1) - \frac{1}{2\sqrt{2}} \log 2 - \frac{1}{\sqrt{2}}.
 \end{aligned}$$

第2問

m を正の整数とすると、2つの整数 a, b について、 $a-b$ が m の倍数であることを $a \equiv b \pmod{m}$ と表記する。

(1) $a_2 = a_1^2 + 1 = 1^2 + 1 = 2, a_3 = a_2^2 + 1 = 2^2 + 1 = 5.$

したがって a_3 は5の倍数である。

また、 m を正の整数として、 a_{3m} が5の倍数であると仮定すると、

$$a_{3m+1} = a_{3m}^2 + 1 \equiv 1 \pmod{5}.$$

$$a_{3m+2} = a_{3m+1}^2 + 1 \equiv 1^2 + 1 = 2 \pmod{5}.$$

$$a_{3m+3} = a_{3m+2}^2 + 1 \equiv 2^2 + 1 \equiv 0 \pmod{5}.$$

したがって、帰納的に n が3の倍数のとき、 a_n は5の倍数である。 (証明終り)

(2) 『正の整数 n, l に対して $a_{n+l} \equiv a_l \pmod{a_n}$ である』…(*)

を l に関する数学的帰納法で示す。

(i) $l=1$ のとき

$$a_{n+1} = a_n^2 + 1 \equiv 1 \pmod{a_n}.$$

したがって、 $a_{n+1} \equiv a_1 \pmod{a_n}$ であるから、(*) は成り立つ。

(ii) $l=j$ のときに(*) が成り立つと仮定すると、

$$a_{n+j} \equiv a_j \pmod{a_n}.$$

このとき、

$$\begin{aligned} a_{n+j+1} &= a_{n+j}^2 + 1 \\ &\equiv a_j^2 + 1 \\ &= a_{j+1} \pmod{a_n}. \end{aligned}$$

したがって、 $l=j+1$ のときも(*) が成り立つ。

(i),(ii) より(*) が成り立つ。

(*) より、任意の正の整数 k, m について、

$$a_{(m+1)k} = a_{k+m} \equiv a_{m} \pmod{a_k}.$$

これを繰り返すと、

$$a_{mk} \equiv a_{(m-1)k} \equiv a_{(m-2)k} \equiv \dots \equiv a_k \equiv 0 \pmod{a_k}. \quad \dots(**)$$

したがって、 n が k の倍数のときは a_n は a_k の倍数である。

また、 n が k の倍数でないとき、($k \geq 2$ で) n を k で割った商を q 、余りを r ($1 \leq r \leq k-1$) とおくと、

$$n = kq + r.$$

したがって(*) より、

$$a_n = a_{kq+r} \equiv a_{k(q-1)+r} \equiv a_{k(q-2)+r} \equiv \dots \equiv a_r \pmod{a_k}. \quad (r=1, 2, \dots, k-1) \quad \dots(***)$$

ここで、漸化式から数列 $\{a_n\}$ は増加数列であるから、 $1 \leq r \leq k-1$ ならば $a_1 \leq a_r \leq a_{k-1}$ であり a_r が a_k の倍数になることはない。よって、 n が k の倍数でないときは a_n は a_k の倍数ではない。

したがって、 a_n が a_k の倍数となるための必要十分条件は、『 n が k の倍数』である。 …(答)

第2問 (つづき)

(3) $8091 = 2022 \times 4 + 3.$

したがって (***) より,

$$a_{8091} \equiv a_3 = 5 \pmod{a_{2022}}.$$

$$(a_{8091})^2 \equiv 25 \pmod{a_{2022}}.$$

よって,

$$(a_{8091})^2 = a_{2022} \cdot N + 25 \quad (N: \text{整数})$$

と表すことができる. ユークリッドの互除法から, a_{2022} と $(a_{8091})^2$ の最大公約数は, a_{2022} と 25 の最大公約数に等しい.

また, $2022 = 3 \cdot 674$ であるから (**) より,

$$a_{2022} \equiv 0 \pmod{5}$$

だから a_{2022} は 5 の倍数である. 一方,

$$a_1 \equiv 1 \pmod{25}, \quad a_2 \equiv 2 \pmod{25}, \quad a_3 \equiv 5 \pmod{25},$$

$$a_4 \equiv 26 \equiv 1 \pmod{25}, \quad a_5 \equiv 2 \pmod{25}, \quad \dots$$

であり, (1) と同様に, 正の整数 m を用いて

$$a_{3m-2} \equiv 1, \quad a_{3m-1} \equiv 2, \quad a_{3m} \equiv 5 \pmod{25}$$

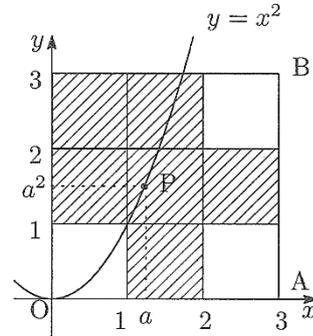
となるので, a_{2022} は 25 の倍数ではない. したがって, a_{2022} と $(a_{8091})^2$ の最大公約数は 5. ... (答)

第3問

(1) D 内で (ii) を満たす点 P の存在領域は右図の斜線部であるから、点 $P(a, a^2)$ において、 $1 \leq a$ かつ $a^2 \leq 3$ が必要十分である。

よって、 $1 \leq a \leq \sqrt{3}$. …… [答]

(2) 図の斜線部の面積は6である。そこから、 P を中心とする1辺の長さが2の正方形の面積4を引き、引きすぎた部分の面積を足せば、 $f(a)$ を求めることができる。



$a^2 + 1$ が3より大きいか大きくないかで場合分けすると、次のようになる。

(i) $1 \leq a \leq \sqrt{2}$ のとき。左下図より $6 - 4 = 2$ に、イ、ロ、ハの長方形の面積を足せばよいので、

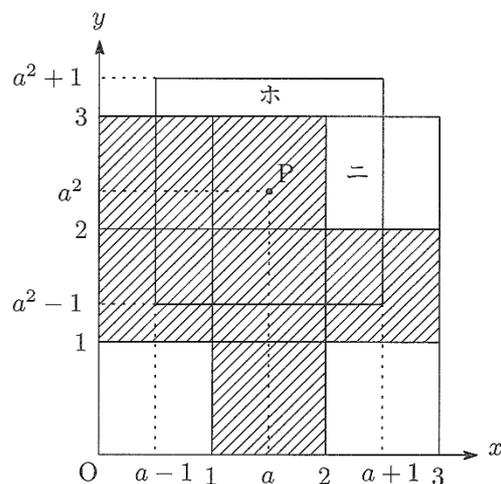
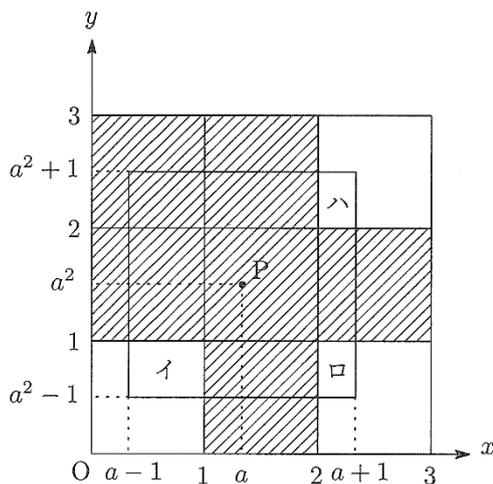
$$f(a) = 2 + (2 - a)(2 - a^2) + (a - 1)(2 - a^2) + (a - 1)(a^2 - 1) = a^3 - 2a^2 - a + 5.$$

(ii) $\sqrt{2} < a \leq \sqrt{3}$ のとき。右下図より $6 - 4 = 2$ に、ニ、ホの長方形の面積を足せばよいので、

$$f(a) = 2 + (a - 1) \cdot 1 + 2(a^2 - 2) = 2a^2 + a - 3.$$

(i), (ii) より

$$f(a) = \begin{cases} a^3 - 2a^2 - a + 5 & (1 \leq a \leq \sqrt{2} \text{ のとき}) \\ 2a^2 + a - 3 & (\sqrt{2} < a \leq \sqrt{3} \text{ のとき}) \end{cases} \dots\dots \text{[答]}$$



(3) $f(a)$ は $1 \leq a \leq \sqrt{3}$ で連続であり、

$$f'(a) = \begin{cases} 3a^2 - 4a - 1 = 3\left(a - \frac{2}{3}\right)^2 - \frac{7}{3} < 5 - 4\sqrt{2} < 0 & (1 < a < \sqrt{2} \text{ のとき}) \\ 4a + 1 > 0 & (\sqrt{2} < a < \sqrt{3} \text{ のとき}) \end{cases}$$

よって、 $f(a)$ は $1 \leq a \leq \sqrt{2}$ で単調減少、 $\sqrt{2} \leq a \leq \sqrt{3}$ で単調増加であるから、 $f(a)$ を最小とする a は

$$a = \sqrt{2}. \dots\dots \text{[答]}$$

第4問

(1) $P(a, b)$ とおく. P を通る直線 l が y 軸に平行なとき, l と C が異なる3点で交わることはない. よって l は y 軸に平行ではないので, 傾きを m とおくと l の方程式は,

$$y = m(x - a) + b$$

である. C の方程式と連立して y を消去すると,

$$x^3 - x = m(x - a) + b \quad \text{すなわち} \quad x^3 - (m + 1)x + am - b = 0 \quad \dots (*)$$

となる. l と C が異なる3点で交わるための条件は,

$$\text{「(*) を満たす相異なる実数 } x \text{ が3個存在すること」} \quad \dots (\#)$$

である. 以下, 任意の実数 a と b に対して, $(\#)$ を満たす実数 m が存在することを示す.

(*) の左辺を $f(x)$ とおくと,

$$f'(x) = 3x^2 - (m + 1)$$

となる. $m + 1 \leq 0$ のとき, $f'(x) \geq 0$ より $f(x)$ は単調増加となるので $(\#)$ を満たす実数 m はない. $m + 1 > 0$ のとき,

$$f'(x) = 3 \left(x - \sqrt{\frac{m+1}{3}} \right) \left(x + \sqrt{\frac{m+1}{3}} \right)$$

となるので, $f(x)$ の増減は次のようになる.

x	...	$-\sqrt{\frac{m+1}{3}}$...	$\sqrt{\frac{m+1}{3}}$...
$f'(x)$	+	0	-	0	+
$f(x)$	↗	極大	↘	極小	↗

また, $\lim_{x \rightarrow \pm\infty} f(x) = \pm\infty$ (複号同順) であるから, $(\#)$ が成り立つ条件は, 極大値と極小値が異符号となることであり,

$$\begin{aligned} f\left(-\sqrt{\frac{m+1}{3}}\right) f\left(\sqrt{\frac{m+1}{3}}\right) &< 0 \\ \left(-\frac{2(m+1)}{3} \sqrt{\frac{m+1}{3}} + am - b\right) \left(\frac{2(m+1)}{3} \sqrt{\frac{m+1}{3}} + am - b\right) &< 0 \\ (am - b)^2 - \frac{4}{27}(m+1)^3 &< 0 \quad \dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

となる.

$$\lim_{m \rightarrow \infty} (\textcircled{1} \text{の左辺}) = \lim_{m \rightarrow \infty} m^3 \left\{ \frac{1}{m} \left(a - \frac{b}{m}\right)^2 - \frac{4}{27} \left(1 + \frac{1}{m}\right)^3 \right\} = -\infty$$

であるから, 任意の実数 a と b に対して, 十分大きな実数 m をとれば $\textcircled{1}$ を満たす. つまり, 任意の実数 a と b に対して, $(\#)$ を満たす実数 m は存在する.

以上より, 座標平面上のすべての点 P が条件(i)を満たす.

(証明終り)

第4問 (つづき 1)

(参考)

任意の実数 a と b に対して, (#) を満たす実数 m が存在することは, 次のように示してもよい.

$$\begin{aligned} f(a-1) &= m + (a-1)^3 - (a-1) - b, \\ f(a+1) &= -m + (a+1)^3 - (a+1) - b \end{aligned}$$

であるから, $\lim_{m \rightarrow \infty} f(a \pm 1) = \mp \infty$ (複号同順) である. したがって, a, b の値に関わらず, 十分大きな m に対して,

$$f(a-1) > 0, \quad f(a+1) < 0$$

となる. また, $\lim_{x \rightarrow \pm \infty} f(x) = \pm \infty$ (複号同順) であり, さらに $f(x)$ は連続であるから, 中間値の定理より, $f(x) = 0$ となる相異なる実数 x が 3 個存在する.

(2) (1)より座標平面上の任意の点 P に対して, P を通り C と相異なる 3 点で交わる直線 l が存在するので, l と C の相異なる 3 交点の x 座標を α, β, γ ($\alpha < \beta < \gamma$) とする. このとき, l の方程式は, 2 点 $(\alpha, \alpha^3 - \alpha)$ と $(\gamma, \gamma^3 - \gamma)$ を通る直線として

$$y = \frac{(\gamma^3 - \gamma) - (\alpha^3 - \alpha)}{\gamma - \alpha}(x - \alpha) + \alpha^3 - \alpha$$

すなわち,

$$y = (\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2 - 1)x - \alpha\gamma(\alpha + \gamma)$$

と表すことができる. C と l で囲まれた 2 つの部分の面積が等しい条件は,

$$\begin{aligned} \int_{\alpha}^{\beta} \{x^3 - x - (\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2 - 1)x + \alpha\gamma(\alpha + \gamma)\} dx &= \int_{\beta}^{\gamma} \{(\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2 - 1)x - \alpha\gamma(\alpha + \gamma) - x^3 + x\} dx \\ \int_{\alpha}^{\beta} \{x^3 - (\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2)x + \alpha\gamma(\alpha + \gamma)\} dx + \int_{\beta}^{\gamma} \{x^3 - (\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2)x + \alpha\gamma(\alpha + \gamma)\} dx &= 0 \\ \int_{\alpha}^{\gamma} \{x^3 - (\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2)x + \alpha\gamma(\alpha + \gamma)\} dx &= 0 \quad \dots \textcircled{2} \end{aligned}$$

となる.

②の左辺を計算すると,

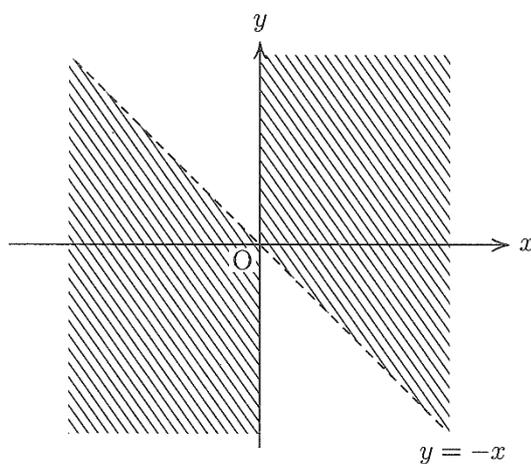
$$\begin{aligned} &\int_{\alpha}^{\gamma} \{x^3 - (\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2)x + \alpha\gamma(\alpha + \gamma)\} dx \\ &= \left[\frac{1}{4}x^4 - (\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2)\frac{1}{2}x^2 + \alpha\gamma(\alpha + \gamma)x \right]_{\alpha}^{\gamma} \\ &= \frac{1}{4}(\gamma^4 - \alpha^4) - (\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2)\frac{1}{2}(\gamma^2 - \alpha^2) + \alpha\gamma(\alpha + \gamma)(\gamma - \alpha) \\ &= \frac{1}{4}(\gamma^2 - \alpha^2) \{(\gamma^2 + \alpha^2) - 2(\alpha^2 + \alpha\gamma + \gamma^2) + 4\alpha\gamma\} \\ &= -\frac{1}{4}(\gamma^2 - \alpha^2)(\gamma - \alpha)^2 \\ &= -\frac{1}{4}(\gamma + \alpha)(\gamma - \alpha)^3 \end{aligned}$$

となる.

第4問 (つづき 2)

$\gamma - \alpha \neq 0$ に注意すると、②が成り立つ条件は $\gamma + \alpha = 0$ である。これより、 $\gamma = -\alpha$ であるから、 $\alpha < \gamma$ は $\alpha < 0$ となり、 l の方程式は $y = (\alpha^2 - 1)x$ となる。逆に、 $\alpha < 0$ かつ l の方程式が $y = (\alpha^2 - 1)x$ のとき、 C と l は $x = 0, \pm\alpha$ の異なる3点で交わる。さらに、 l と C で囲まれた2つの部分の面積は等しくなり、条件(ii)を満たす。

したがって、実数 α が $\alpha < 0$ を満たして動くときの直線 $y = (\alpha^2 - 1)x$ が通過する範囲が、求めるべき P のとりうる範囲である。この直線は原点を通り、傾き $\alpha^2 - 1$ のとりうる値の範囲が $\alpha^2 - 1 > -1$ であるから、 P のとりうる範囲は次の図の斜線部分 (境界は原点のみ含む) のようになる。



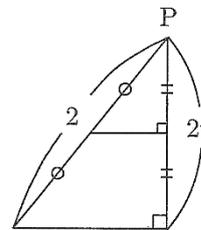
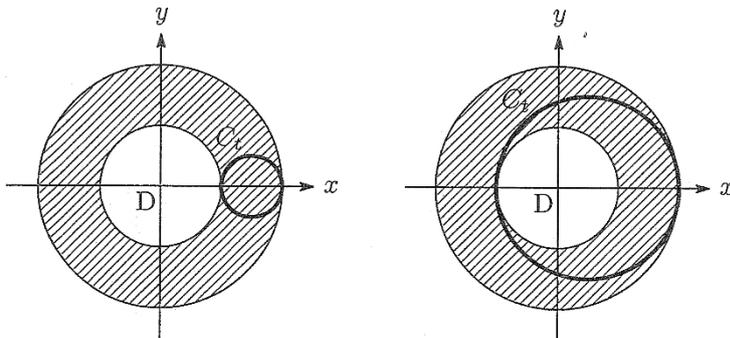
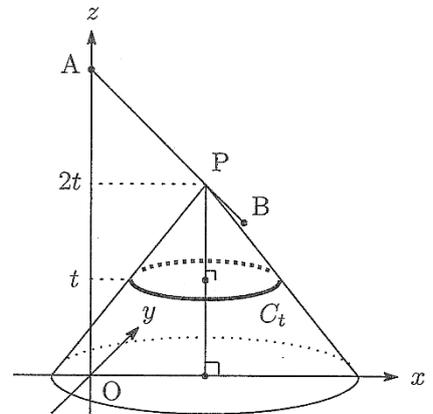
…(答)

第5問

P が線分 AB: $z = 2 - x$ ($0 \leq x \leq 1$), $y = 0$ 上の点
 $(2 - 2t, 0, 2t)$ ($\frac{1}{2} \leq t \leq 1$) の場合の M の存在領域を考えて, それを z 軸の周りに回転すれば K ができる.

Q は P を中心とする半径 2 の球面と xy 平面の交円を描く. その交円の中心は $(2 - 2t, 0, 0)$ であり, 半径は

$\sqrt{2^2 - (2t)^2} = 2\sqrt{1 - t^2}$ となる. (三平方の定理から). この円を, P を中心に $\frac{1}{2}$ に縮小した円 C_t が, M の軌跡である. つまり, C_t は平面 $z = t$ 上にあり, 中心は $(2 - 2t, 0, t)$, 半径は $\sqrt{1 - t^2}$ となる.



平面 $z = t$ 上で, 円 C_t は $D(0, 0, t)$ を含む場合 (上右図), 含まない場合 (上左図) があるが, どちらにしても, D を中心に回転すると, 半径 $(2 - 2t) + \sqrt{1 - t^2}$ の円と半径 $|(2 - 2t) - \sqrt{1 - t^2}|$ の円で挟まれた領域になる. これが K を平面 $z = t$ で切った切り口である. その面積を $S(t)$ とおくと,

$$\begin{aligned} S(t) &= \pi \left\{ (2 - 2t) + \sqrt{1 - t^2} \right\}^2 - \pi \left\{ (2 - 2t) - \sqrt{1 - t^2} \right\}^2 \\ &= 4\pi(2 - 2t)\sqrt{1 - t^2} \\ &= 8\pi\sqrt{1 - t^2} - 8\pi t\sqrt{1 - t^2} \end{aligned}$$

求める体積 V は,

$$V = \int_{\frac{1}{2}}^1 S(t) dt = 4\pi \int_{\frac{1}{2}}^1 2\sqrt{1 - t^2} dt - \pi \int_{\frac{1}{2}}^1 8t\sqrt{1 - t^2} dt. \quad \dots (*)$$

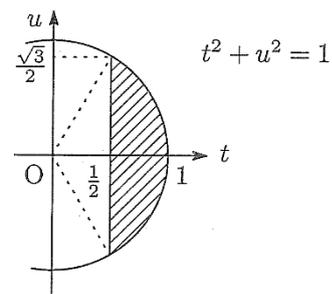
第 1 項の積分は, 右図斜線部の面積であるから,

$$\frac{1}{3} \cdot \pi \cdot 1^2 - \frac{1}{2} \cdot \frac{\sqrt{3}}{2} = \frac{\pi}{3} - \frac{\sqrt{3}}{4}.$$

第 2 項の積分は,

$$\left[-\frac{8}{3}(1 - t^2)^{\frac{3}{2}} \right]_{\frac{1}{2}}^1 = 0 + \frac{8}{3} \left(\frac{3}{4} \right)^{\frac{3}{2}} = \sqrt{3}.$$

よって,



第5問 (つづき1)

$$\begin{aligned} V &= 4\pi \left(\frac{\pi}{3} - \frac{\sqrt{3}}{4} \right) - \pi\sqrt{3} \\ &= \frac{4}{3}\pi^2 - 2\sqrt{3}\pi. \end{aligned} \quad \dots (\text{答})$$

(注) (*) の積分は $t = \sin \theta$ ($-\frac{\pi}{2} \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}$) と置換するのも自然である. すると,

$$\begin{aligned} (*) &= 8\pi \int_{\frac{1}{2}}^1 (1-t)\sqrt{1-t^2} dt \\ &= 8\pi \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{2}} (1-\sin \theta) \cos \theta \cdot \cos \theta d\theta \\ &= 8\pi \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{2}} (\cos^2 \theta - \sin \theta \cos^2 \theta) d\theta \\ &= 8\pi \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{2}} \left\{ \frac{1+\cos 2\theta}{2} + (\cos \theta)' \cos^2 \theta \right\} d\theta \\ &= 8\pi \left[\frac{1}{2}\theta + \frac{\sin 2\theta}{4} + \frac{(\cos \theta)^3}{3} \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{2}} \\ &= 8\pi \left\{ \frac{1}{2} \left(\frac{\pi}{2} - \frac{\pi}{6} \right) + \left(0 - \frac{\frac{\sqrt{3}}{2}}{4} \right) + \left(0 - \frac{\frac{3\sqrt{3}}{8}}{3} \right) \right\} \\ &= \frac{4}{3}\pi^2 - 2\sqrt{3}\pi \end{aligned}$$

となる.

第5問 (つづき2)

注) K の方程式の求め方として、以下の同値変形を行う方法もある。

実数 a, b, c に対して、 $\lceil (a, b, c) \in K \rceil$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} \lceil S \text{ 上の点 } P(x, y, z) \text{ と } xy \text{ 平面上の点 } Q \text{ が存在して,} \\ \bullet PQ \text{ の中点が } (a, b, c) \\ \bullet PQ = 2 \end{cases} \rceil$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} \lceil S \text{ 上の点 } P(x, y, z) \text{ が存在して,} \\ \bullet (2a-x, 2b-y, 2c-z) \text{ が } xy \text{ 平面上にある。} \\ \bullet P(x, y, z) \text{ と } (a, b, c) \text{ の距離が } \frac{2}{2} = 1 \end{cases} \rceil$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} \lceil S \text{ 上の点 } P(x, y, z) \text{ が存在して,} \\ \bullet 2c - z = 0 \\ \bullet (x-a)^2 + (y-b)^2 + (z-c)^2 = 1 \end{cases} \rceil$$

$$\Leftrightarrow \lceil S \text{ 上の点 } P(x, y, 2c) \text{ が存在して,} \\ (x-a)^2 + (y-b)^2 + c^2 = 1 \rceil$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} \textcircled{*} \lceil 1 \leq 2c \leq 2 \text{ かつ,} \\ x^2 + y^2 = (2-2c)^2 \text{ と } (x-a)^2 + (y-b)^2 = 1-c^2 \text{ が共有点を持つ。} \\ \text{(} xy \text{ 平面で } 2 \text{ 円が共有点を持つ条件を考えた。)} \end{cases}$$

$$\Leftrightarrow \frac{1}{2} \leq c \leq 1 \text{ かつ, } |(2-2c) - \sqrt{1-c^2}| \leq \sqrt{a^2+b^2} \leq (2-2c) + \sqrt{1-c^2} \rceil$$

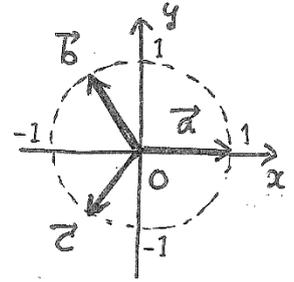
(三角不等式)

$$\left(\textcircled{*} \text{ ここで } S = \{(x, y, z) \mid 1 \leq z \leq 2, x^2 + y^2 = (2-z)^2\} \text{ であることを用いた。} \right)$$

このことを用いて、 K を $z=t$ で切った切り口が、半径 $|(2-2t) - \sqrt{1-t^2}|$ の円と半径 $(2-2t) + \sqrt{1-t^2}$ の円で挟まれた領域であることを示すこともできる。

第6問

$\vec{a} = (1, 0), \vec{b} = (-\frac{1}{2}, \frac{\sqrt{3}}{2}), \vec{c} = (-\frac{1}{2}, -\frac{\sqrt{3}}{2})$
 とする。これら何個かずつ加えたものが \vec{OX}_N である。
 つまり、 $\alpha, \beta, \gamma \in 0$ 以上の整数として



$$\vec{OX}_N = \alpha \vec{a} + \beta \vec{b} + \gamma \vec{c}$$

と表せる。ここで、 X_N が 0 にある、つまり $\vec{OX}_N = \vec{0}$ となるとき、 y 成分に注目すると $\beta = \gamma$ が必要で、さらに x 成分に注目すると $\alpha = \beta = \gamma$ が必要である。逆に $\alpha = \beta = \gamma = \alpha$ のとき $\vec{OX}_N = \alpha(\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) = \vec{0}$ となる。つまり、 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ の向きを移動は同じ回数だけ起こり、コインを N 回投げたとき表の出る回数は 3 の倍数である。

$\vec{v}_{3l-3} = \vec{a}_l, \vec{v}_{3l-2} = \vec{b}_l, \vec{v}_{3l-1} = \vec{c}_l$ ($l=1, 2, 3, \dots$) とし、裏が出ることを順に Y_1, Y_2, Y_3, \dots と表すことにする。

(1) X_8 が 0 にあるのは次の場合がある。

(ア) 表の出る回数が 0 のとき、

表裏の出方は $Y_1 Y_2 \dots Y_8$ の 1 通り

(イ) 表の出る回数が 3 のとき、

$\vec{a}_l, \vec{b}_l, \vec{c}_l$ の移動が起こる場所を表中に 0 で表すと次の通り、

\vec{a}_1 か \vec{a}_2 に 0 をひくと、 \vec{b}_1 か \vec{b}_2 に 0 をひくと \vec{c}_1 か \vec{c}_2 に 0 をひくと並べると考える。

\vec{a}_1	Y_1	\vec{b}_1	Y_2	\vec{c}_1	Y_3	\vec{a}_2	Y_4	\vec{b}_2	Y_5	\vec{c}_2
○		○		○						
○		○								○
○				○				○		
○								○		○
		○		○		○				
		○				○				○
				○		○		○		
						○		○		○

よって、 $(2C_1)^3 = 8$ 通りの表裏の出方がある。

第6問 (つづき1)

(ウ) 表の出る回数が6のとき

$\overline{a_1}$	γ_1	$\overline{b_1}$	γ_2	$\overline{c_1}$
00		00		00

表裏の出方は右のようになり

(ア)(イ)(ウ)より計10通りの表・裏の出方があり $X \neq 0$ になる確率は

$$\frac{10}{2^6} = \frac{5}{128} \quad \dots (\text{答})$$

(2) $\gamma = 3m$ ($m=0, 1, 2, \dots, 66$) とおくと、裏は $200-3m$ 回出る。(1)と同様に考え、

$\overline{a_1} \gamma_1 \overline{b_1} \gamma_2 \overline{c_1} \gamma_3 \overline{a_2} \gamma_4 \overline{b_2} \gamma_5 \dots \gamma_{3(67-m)-2} \overline{b_{67-m}} \gamma_{3(67-m)-1} \overline{c_{67-m}}$
 の並びの $\overline{a_1}, \overline{a_2}, \dots, \overline{a_{67-m}}$ は $0 \leq m$ 個, $\overline{b_1}, \overline{b_2}, \dots, \overline{b_{67-m}}$ は $0 \leq m$ 個, $\overline{c_1}, \overline{c_2}, \dots, \overline{c_{67-m}}$ は $0 \leq m$ 個並べられ、並べ方は総数を求める。
 $\overline{a_1}, \overline{a_2}, \dots, \overline{a_{67-m}}$ は $0 \leq m$ 個並べられ、並べ方は、 $1, 2, \dots, 67-m$ から重複を許して m 個選ぶ選び方の総数に等しく、これは

$$\underbrace{00 \dots 0}_m \quad \underbrace{11 \dots 1}_{66-m \text{ 本}}$$

の並べ方を考え、 $m+66-m C_m = 66 C_m$ 通りある。他の場合も同様にして

$$p_{3m} = \frac{(66 C_m)^3}{2^{200}}$$

$\gamma \neq 3m$ のとき $X_{200} \neq 0$ にならない、求める確率は

$$p_\gamma = \begin{cases} \frac{(66 C_{\frac{\gamma}{3}})^3}{2^{200}} & (\gamma \text{ が } 3 \text{ の倍数}) \\ 0 & (\gamma \text{ が } 3 \text{ の倍数以外}) \end{cases} \quad \dots (\text{答})$$

すなわち $p_{3(m+1)} \geq p_{3m}$ とする m を考え、

$$\left\{ \frac{66!}{(m+1)!(66-(m+1))!} \right\}^3 \frac{1}{2^{200}} \geq \left\{ \frac{66!}{m!(66-m)!} \right\}^3 \frac{1}{200}$$

$(m+1)!(66-(m+1))! \leq m!(66-m)!$ (可成り $m+1 \leq 66-m$ より) $m \leq \frac{65}{2}$

$m=0, 1, \dots, 32$ のとき $p_{3(m+1)} > p_{3m}$, $m=33, 34, \dots, 65$ のとき $p_{3(m+1)} < p_{3m}$

なる $p_0 < p_{3 \cdot 1} < p_{3 \cdot 2} < \dots < p_{3 \cdot 32} < p_{3 \cdot 33} > p_{3 \cdot 34} > \dots > p_{3 \cdot 66}$

よって、 p_γ が最大となる γ は $\gamma = 3 \cdot 33 = 99$... (答)

第6問 (つづき2)

(参考) r が 3 の倍数のとき

$$p_r = \left\{ \frac{66!}{\left(\frac{r}{3}\right)! \left(66 - \frac{r}{3}\right)!} \right\}^3 \frac{1}{2^{200}}$$

と表すこともできる。